

1 総括

(1) 教育目標（学校経営案より）

＜教育目標＞ 心豊かで たくましく 創造力のある 人になろう	＜めざす生徒像＞ ○深く考え、自ら学び、自己を高める生徒 ○自他のいのちを尊重し、人間性豊かな生徒 ○積極的に心身を鍛え、共に生きぬく生徒 ○地域に目を向け、郷土を愛する生徒
--	---

(2) 重点努力目標

ア 個を生かす教育の充実

(ア) 七つの宝を大切にした教育活動を展開する。

「①みんなハッピーしっぴータイム、②先手必勝の挨拶、③心を磨く無言清掃、④自信あふれる返事、⑤絆深める合唱、⑥全力パフォーマンス、⑦かけがえのない命」を合い言葉に、その実践力の定着を図る。

(イ) ICT を活用し、自ら学び自ら考える力の育成を図り、Society5.0 時代を生き抜く生徒を育成する。

(ウ) 特別な支援を必要とする生徒の指導について、校内の支援体制を充実し、教育相談活動などで生徒理解に努め、問題行動や学校不適応の予防に努める。

イ 豊かな心を育てる教育の充実

(ア) 生徒指導の充実を図り、「正義がとおる学校づくり」を推進する。

(イ) 心に響く道徳授業の工夫や総合的な学習、特別活動での体験的活動の充実などで、「自他の命を大切にする心」と「思いやりの心」を育む。

(ウ) 部活動や生徒会活動などを通して、協力してよりよい生活を築こうとする自主的・実践的な態度を育成する。

ウ 健康・安全教育の充実

(ア) 新型コロナウイルス感染症拡大防止に向けた対策（三密を避ける）を万全に行う。

(イ) 生活の中から健康課題を見つけ、その課題の解決に向けて努力する生徒を育てる。

(ウ) 交通ルールの遵守など「自分の命は自分で守る」という意識を高め、実際に行動できる生徒を育てる。

エ 家庭や地域社会との連携

(ア) コミュニティスクールの活動を充実させ、地域の各種団体や PTA 等と連携を図りながら、積極的に地域の教育力を活用する。

(イ) 家庭や地域と連携し、挨拶の励行や交通マナーの向上の取組を進めたり、地域の行事に参加したりして、地域の信頼に応える。

(ウ) 学校だより、学年だよりや学校ホームページなどを通じて学校の情報を家庭・地域に発信し、学校の教育活動の周知に努める。

オ 多忙化解消に向けた取組

(ア) タイムカードを活用し、教職員自らが勤務時間の具体的把握に努め、効率のよい執務実現に向けた意識化を図る。

(イ) 一斉退校日や、学年退校日、自主退校日を設定することで、在校時間削減の一助とする。

(ウ) 一部の教職員に、過重な負担がかからないような適正な校務分掌の割り振りを行うとともに、行事や会議の精選について引き続き検討し改善していく。

2 自己評価の実施体制

- (1) アンケート時期 令和4年11月10日(木)～12月2日(金)
- (2) アンケート項目 別紙参照
- (3) アンケート対象・有効回答者数／対象者数
生徒 ・353名／全校生徒405名
保護者・227家庭／全家庭365家庭(回収率62.2%)
教職員・29名／29名

3 アンケート結果

別紙参照 学年別集計参照

4 考 察

【成果● 課題▼】

Q1 「基本的生活習慣は身に付いている」について ▼

どの学年の生徒も、生活習慣は概ね身に付いていると認識しており、教職員も積極的に指導していることがうかがえる。保護者も概ね身に付いていると認識しているが、家庭での生活からまだ不十分な部分があると感じていることがわかる。具体的には、スマートフォンの操作やゲームに費やす時間が長いことを危惧する保護者の声が多い。また、スマートフォンの使用上のルールを話し合っても守れないことがあり、一時的に保護者が端末を預かり、使用できないようにしている家庭もあるようである。今後も学校と保護者が協力しながら指導にあたっていきたい。

Q2 「わかりやすい授業が実践されている」について ▼

ほとんどの教職員は、わかりやすい授業づくりに努めていると回答しているが、生徒や保護者は、今以上にわかる授業を望んでいる。また、昨年よりも教職員と生徒の認識の差が広がっている。昨年からの課題の克服が不十分であることは明白であり、改善策を見直さなければならない。

Q3 「教育相談活動を充実させ、温かい人間関係づくりに取り組んでいる」について

平均値では、昨年度よりも肯定的な回答をした生徒の割合が高まっている。しかし、学年によっては、半数以上の生徒が否定的な回答をしており、学校として重く受け止めている。教育相談や二者懇談を定期的に行うなど、生徒の声を吸い上げる場も設定しているが、授業を含めた学級での日常的な関わりをさらに積み上げていかなければならない。

Q4 「学校行事では生徒が主役となって活躍している」について ●

生徒、保護者ともに肯定的な回答の割合が高くなっており、本校の教育活動の成果といえる。今後も引き続き、今の指導体制を継続していきたいと考える。

Q5 「いじめのない学校づくりに十分にに取り組んでいる」について

生徒は、いじめのない生活に向けて思いやりの心をもって人に接しており、肯定的な回答の割合は、昨年とほぼ同等である。いじめは絶対に許さないと認識のもとで教職員は指導に当たっているが、引き続き毅然とした指導体制を維持していきたい。

Q6 「部活動に意欲的に取り組んでいる」について ●

生徒、保護者ともに、ほぼ昨年同様の結果になった。日常生活を取り戻しつつあり、納得のいく活動ができていると考える。あま市の部活動指導ガイドラインに則って、引き続き感染対策を意識しながら、達成感のある活動を展開していきたい。

Q7 「健康に気をつけて生活している」について ▼

ほぼ昨年と同様の結果になったが、教職員の肯定的な回答の割合が、昨年から10ポイントほど下がっている。生徒が校内でけがをすることは日常的にあるが、危険を予測すれば回避できる事例も少なかった。落ち着いた生活を送ることに加え、招き得る事故を想定する指導の必要性もあると考える。生徒と保護者の回答では、昨年度から肯定的な回答の割合が高まっているが、一昨年度に比べると低い値を示しており、昨年度に引き続き、本校の課題といえる。

Q8 「交通ルールを守って登下校している」について

昨年同様に、生徒、保護者、教職員ともに肯定的な回答がほとんどであったが、地域から寄せられる声に耳を傾けると、保護者や教職員の目が行き届かないところで自転車の並列走行、信号無視、一旦停止無視などがあるようである。引き続き、地域や保護者の力を借りながら、安全指導を行っていききたい。

Q 9 「地域の人材や環境を生かした教育活動をしている」について

ほぼ昨年同様の結果であった。地域の行事が完全には戻りきっていないところもあるだろうが、ボランティア活動に進んで参加したり、積極的に挨拶をしたりして、地域とつながりをもとうとしている生徒は多くいるようである。

Q 10 「学校の様子がきちんと家庭に伝わっている」について

昨年度とほぼ同じ結果になったが、学校での様子が伝わっていると感じている保護者の割合が徐々に低くなってきている。学年通信や学校通信、ホームページなどで引き続き情報を発信していくが、紙媒体に頼らずに、いろいろな方法を検討していききたい。また、保護者の方に学校に来ていただく機会は限られているので、懇談を中心に日ごろの様子をお伝えできるよう努めていききたい。

Q 11 「自己肯定感・自尊感情が育っている」について ●

生徒と教職員では、昨年度よりも「よく当てはまる」と回答した割合が顕著に高まっている。保護者は肯定的な回答をした割合は昨年並であり、しゅっぱータイムを中心とした取り組みの成果であると考え。今後も人との関わりを大切にした日常的な取り組みを大切にしていきたい。

Q 12 「楽しい学校生活を送っている」と

Q 13 「学校での授業や生活を通して、自分が「成長した」「伸びた」と感じたことがある」について

肯定的な回答をした生徒の割合は、昨年度並みであった。学校行事や部活動では、一定の成果を上げているが、Q 2の授業のわかりやすさが十分でないことから、いきいきと生徒が授業で活躍でき、わかる楽しさ、できる楽しさを味わえる授業づくりをしていかなければならない。

Q 13は、昨年と同様の結果だった。成長を実感できる機会が日常的にあふれるように努めていく必要がある。

Q 14 タブレットに関する意識調査

肯定的な回答をした生徒の割合は、昨年同様、高い値を示した。ほとんどの生徒は、マナーを守って適切に使用しているが、学習以外の用途で使用してしまうこともあった。保護者に協力していただきながら、情報モラル教育を引き続き推進していききたい。

その他

校則の見直しを求める生徒からの回答が複数あった。集団生活を基本とした学校が、学びの場としてふさわしい環境を整えられるよう、きまりが設定されている。進学だけでなく就職を含めて社会に巣立つことを見据え、根拠をもって校則があることを理解してほしい。生徒にとって納得感のある校則になるよう、生徒との対話を大切にしていきながら、必要に応じて見直しをしていきたい。

5 成果と課題

《成果》

「学校行事では主役となって活躍している」「自己肯定感・自尊感情が育っている」「部活動に意欲的に取り組んでいる」の3点は、肯定的な回答の割合から成果といえる。学校行事や部活動、しゅっぱータイムの取り組みなどには、あま市の「特色ある学校づくり推進事業」として補助金をいただいております、講師を招いたり、備品を購入したりしている。市からの支援を十分に生かしながら、生徒が活躍できる機会を大切にしていききたい。自己肯定感や自尊感情の育成については、本校が教育の柱にしている「しゅっぱータイム」の取り組みを積み重ねていくことで、成果を維持、向上させていくことができると考える。同じ取り組みをしている全国の小中学校とも連携しながら、さらに研究を推進していききたい。

《課題》

- (1) 「わかりやすい授業」について、生徒・保護者と教職員の間に認識の差が生じている。
- (2) スマートフォンやゲームの使用状況が好ましくない。

6 改善策

- (1) 「わかりやすい授業」について

昨年度も課題として挙げていたが、成果を十分に得られることができなかった。昨年度、改善策として記したように、以下の取り組みを継続して行ってきた。

- ① 週時程の中に教科部会を組み込み、教材解釈や授業進度などの情報交換を十分に行う。
- ② タブレット端末や演習プリントを活用し、学習習慣と基礎学力の定着を図る。
- ③ テスト週間に質問教室を行い、指導の補充を図る。

教科部会を設定していることで、教職員が足並みをそろえて指導に当たることができるため、今後も継続していきたい。タブレット端末の利用については、授業の中で効果的に利用できるように利用方法を教科部会などで情報交換するようにしたい。やみくもに端末を使えばよいというものではないので、意見交換、知識・技能の定着など、利用目的を焦点化して利用していきたい。

生徒の主体的で対話的な学びのために、教師の指導力を向上させていくことは必須である。しっぴータイムで行っている話し合い活動を教科等の指導に取り入れた「しっぴートーク」が、有機的に取り入れられているかを教職員同士が研修を深められるようにしていきたい。

- (2) スマートフォンの使用について

スマートフォンなどの適切な使用のために、サイバー犯罪防止教室（1年生）や学校保健委員会などで取り上げて指導してきた。月曜の朝に行われる朝礼においても、SNSの利用について生徒指導主事から度々指導を重ねてきた。長時間の視聴が健康を損なう恐れがあること、そして、使い方によっては人権を侵害しかねないことなど、スマートフォンの扱いについて危険がつきまとうことを十分理解して、健全な利用に心がけたい。令和4年7月7日に侮辱罪に関わる法定刑が引き上げられた。生徒本人だけでなく、家庭、学校の身近な大人も自分事として捉えて、協力して指導に当たっていく必要がある。

生徒は、SNSで友達と交流しているだけでなく、動画の視聴にも多くの時間を費やしている。利用について一定のルールを設定している家庭は多いと考えられるが、実効性のあるルールとなるよう毅然とした対応が必要であると考え。そして、お互いの家庭のルールを生徒同士が堂々と伝え合い、相手のことを考えてコミュニケーションをとることができるようにしていきたい。